九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

二〇一八年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本研究の課題と展望 文学・言語・社会」

大場, 健司
台灣國立國防大學

賴, 怡真
東吳大學

https://doi.org/10.15017/2344809

出版情報：九大日文. 33, pp.101-105, 2019-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎イベント・レビュー

二〇一八年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本研究の課題と展望 文学・言語・社会」

大場健司（OBA Kenji）・賴怡真（LAI Yichen）

筆者（大場健司）は、韓国・光州の朝鮮大学校外国語学部日本語科で一年間、教育と研究を行っていたが、二〇一八年一〇月に台湾・台北の国立国防大学語文中心への異動を行った。台北では台湾日本語文学会を始めとする学会や、国立台湾大学、政治大学、東呉大学、輔仁大学、淡江大学といった大学で日本近現代文学が活発に研究されていることもあり、筆者もよく学会やシンポジウムに参加するようにしている。

二〇一八年一二月一五日、台湾の輔仁大学徳芳外語大楼において、二〇一八年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本研究の課題と展望 文学・言語・社会」が開催された。各研究発表の詳細については、国際学会プロシーディング『2018 年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本研究の課題と展望 文学・言語・社会」』（輔仁大学、二〇一八年一二月）に収録されている。

この国際シンポジウムは、台湾日本語文学会によって毎年一回開催されているもので、台湾や日本、韓国の四〇名を超える研究者が研究発表を行った。また、台湾日本語文学会は二〇一七年一二月一六日に昭和文学会と姉妹学会の締結を行っていることもあり、昭和文学会代表幹事の和田博文氏（東京女子大学）が基調講演「日台共同研究の可能性と課題」を行っている。

このように、台湾における日本研究の可能性こそが、今回の各発表において議論されてきたものだと言ってもよい。例えば、勝又基氏（明星大学）の口頭発表「台湾から見える日本文学研究の新たな景色――日本、米国の現状と比較して」においては、日本／アメリカの日本古典文学研究が比較され、日本の精緻な作品研究と書誌研究、そしてアメリカの自由な研究スタイルの共存が台湾では可能ではないかと提言された。勝又氏は『リポート笠間』第六三号（二〇一七年一一月）所収の「英語での学会発表が気になる日本文学研究者のために」においても、アメリカにおける研究の現状を紹介しており参考になる。文学研究の国際化や学際化はなされていくべきだろうが、その国際化が英語帝国主義に陥る可能性も危惧せねばなるまい。むしろ、日本語や英語のみならず中国語や韓国語など、多様な言語で更なる研究の国際化が行われる必要があろう。

台湾における日本研究を意識した発表には、齋藤正志氏（中国文化大学）の口頭発表「〈時間〉の旅、その遡行と循環――川上弘美「墓を探す」における「ほととぎす」の役割――」がある。この発表では、中国語／日本語の古典における「ほととぎす」の役割から川上弘美（一九五八年―）の「墓を探す」（『中央公

論 文芸特集』一九九五年九月号）が論じられていた。

また、ポスター発表においても若い研究者による興味深い研究が発表されていた。張彩薇氏（京都大学博士前期課程）の「1950年代日本における台湾認識」では、一九五〇年代に平凡社から出版された『世界の子ども』全一五巻の『世界の子ども 中国・朝鮮篇』（平凡社、一九五五年八月）における「台湾の子ども」の表象が、同時代の日本と中国の関係から論じられていた。

徐翌氏（神戸大学博士後期課程）の「日本SFの浸透と拡散――SF同人誌を中心に――」では、一九七〇年代におけるSFブームを支えた雑誌『終末から』全九号（筑摩書房、一九七三年六―一〇月）や『奇想天外』全一〇号（盛光社、一九七四年一―一〇月）の出版状況が詳細に論じられていた。例えば、『終末から』のイラストレーターは、マンガ雑誌『ガロ』全三九三号（一九六四―二〇〇二年）の漫画家から招集していたなど、サブカルチャーとのメディア・ミックスが論じられており、興味深かった。

次に、筆者（賴怡真）が、前述の和田博文氏の基調講演について述べたい。この講演では、和田氏は自らが過去二〇年間で携わってきた仕事を、比較研究（日本人の異文化体験）／文化研究／文学研究（詩）という三つの領域に分けている。今回のシンポジウムのテーマ「台湾における日本研究の課題と展望――文学・言語・社会」は、この中でも比較研究（日本人の異文化体験）と最も符合しているだろう。『言語都市・上海 1840-1945』（藤原書店、一九九九年九月）を皮切りに、『言語都市・パリ――1862-1945』（藤原書店、二〇〇二年三月）や、『パリ・日本人の心象地図――1867-1945』（藤原書店、二〇〇四年二月）、『言語都市・ベルリン――1861-1945』（藤原書店、二〇〇六年一〇月）、『言語都市・ロンドン――1861-1945』（藤原書店、二〇〇九年六月）といった具合に、ほぼ二年間の間隔で一連の言語都市に関するシリーズが出版されてきた。このシリーズで探究されてきたのは、日本人のヨーロッパの主要都市での異文化体験だと言ってもよい。その後、和田氏は研究対象を再びアジアに移して二〇一四年一〇月に『上海の日本人社会とメディア――1870-1945』（岩波書店）を発表しており、二〇一九年に台湾を対象とする『帝国幻想と台湾』を刊行する予定であるという。上述した和田氏の研究のもう一つの特徴として言えるのは、和田氏が合同研究を行ってきたことだろう。和田氏は比較研究（日本人の異文化体験の研究）における複層的な視座の重要性を説いており、「研究対象を特定の文学者に限定せず、さらに文学表現を特権化しない」で、視座を複数化するためには、海外の研究者との共同研究の必要があるという。前述した和田氏の一連の著書では、合同研究者として例えば、台湾の呉佩珍氏（国立政治大学）や横路啓子氏（輔仁大学）、中国の徐靜波氏（復旦大学）などの名が挙げられている。日本人の異文化体験を論じる際には、和田氏による一連の著書のタイトルにあるように、「上海」や「パリ」、「ベルリン」といった大都市にばかり研究対象が限定化されていることになる。このような研究対象の特権化を突破するために和田氏が行なったのが、『〈異郷〉としての大連・上海・台北』（勉誠出版、二〇一五年三月）の出版であった。この著作では、上海に限定され

ない複数の〈異郷〉を扱うことで、視座が複数化されていると言ってもよい。

かつて呉智英は「北海道開拓は、一面で満州国建国と相似形」（「安彦良和と戦後思潮」『ユリイカ』九月号、二〇〇七年九月、七一頁）を成していると指摘したが、ハードボイルド作家、船戸与一（一九四四―二〇一五年）の作品と満洲国建国との共通性を見いだしたのが、坂元さおり氏（輔仁大学）の「船戸与一『蝦夷地別件』論――「アイヌ最後の戦い」を「ハードボイルド」はどう描くか」であった。アイヌ最後の戦いと言われる「メナシ・クナシリの戦い」（一七八九年）を描いた蠣崎波響（一七六四―一八二六年）の『夷酋列像』（一七九〇年一一月）においては、首長への敬意が込められるという見方がある一方、松前藩側にとって都合のよい「御味方アイヌ」像が描かれているという見方もある。坂元氏は、船戸の『蝦夷地別件』のタイトル自体が、幕府側の『蝦夷地一件』や松前藩側の『寛政蝦夷乱取調日記』などへの対抗となっており、そこに「別件」を提示するという強烈なメッセージがあることを指摘している。そして船戸は『蝦夷地別件』を発表した後、一連の台湾ものや、『満州国演義』（二〇〇七年四月―二〇一五年九月）を書き続けたのであり、こういった作家の軌跡は、日本の北海道開拓やその後の満洲国建国の軌跡と相似を成していると結論づけられている。

游書昱氏（名古屋大学博士後期課程）「『新青年』、男の化粧、そしてモダン・ボーイ」は、『新青年』（一九二〇年一月―一九五〇年七月）に登場するモボ（モダン・ボーイ）に関する考察である。ここではとりわけ「男の化粧」が挙げられ、化粧の再ジェンダー化が行なわれていると論じられている。また、従来の女性の領域を超え、男性の領域にまで広がったことが示唆されているという。そして、一九二〇年にモボの流行が最高潮に達し、一九二九年に同様に『新青年』によって新たに「シボ」（シイク・ボーイ）という造語が作られ、新しい枠組が形成されるのと同時に、モボが消えていった、というのが本発表の結論であった。日本のモボが消えていくのと同じ時期に、一九三〇年代の韓国・ソウル（当時の朝鮮・京城）ではモボが登場しており、その研究成果がすでに波潟剛「昭和モダンの展開／転回――1930～40年代東アジアにおける文化翻訳のポリティクス」（科学研究費助成事業基盤C、二〇一四年四月――二〇一七年三月）といった一連の研究で発表されていることは重要である。さらに日本領（一八九五―一九四五年）だった台湾においても、「烏狗」（「黒犬」、転じて「モダン・ボーイ」）や「烏猫」（「黒猫」、転じて「モダン・ガール」）、「毛断」（モダン）といった言葉が定着していることからもわかるように、日本のモボの発生と消滅は日本国内に限定されるものではなく、帝国の拡大と連動していたことも視野に入れるべきではあるまいか。

【開会式】

松原一樹（日本台湾交流協会台北事務所）、賴振南（輔仁大学）

【基調講演】

和田博文（東京女子大学）「日台共同研究の可能性と課題」

佐久間淳一（名古屋大学）「時間表現の多様性と普遍性について」

【第一会場】
西幸子（福岡大学特別選抜研究員）「騎馬民族征服王朝説と古墳時代の馬具」
小澤尚平（福岡大学博士後期課程）「南北朝の幕府と九州探題」
柳原暁子（北九州市立松本清張記念館）「時空を超えて――絲山明子「離陸」論」
坂元さおり（輔仁大学）「船戸与一『蝦夷地別件』論――「アイヌ最後の戦い」を「ハードボイルド」はどう描くか」
黄馨儀（中国文化大学）「ＮＨＫ朝の連続テレビ小説の台湾受容――『あさが来た』を中心に」
游書昱（名古屋大学博士後期課程）「『新青年』、男の化粧、そしてモダン・ボーイ」
下岡友加（広島大学）「『台湾愛国婦人』掲載・英塘翠「生蕃お伽噺」考」
曾秋桂（淡江大学）「エコフェミニズムの視点から読む村田紗耶香の『コンビニ人間』――学習型の人工知能ＡＩ的主人公の誕生について――」
葉菱（淡江大学）「村上春樹文学における自己への追求」
【第二会場】
仁平道明（東北大学名誉教授）「フィクションにおける時間の設定――『竹取物語』『源氏物語』を中心に――」
李美淑（ソウル大学校客員研究員）「『土佐日記』と『蜻蛉日記』における「今日」という時間表現」
佐藤敬子（元横浜市立大学看護短期大学非常勤講師）「時間を越えた教訓――『沙石集』における『竹取物語』引用――」
中村祥子（輔仁大学）「『更科日記』における「天喜三年十月十三日」という時間――時間を遡って記される記事の意味について――」
木下華子（ノートルダム清心女子大学）「『方丈記』の時間――「朧化」をめぐって――」
戸田哲也（景文科技大学）「「日本人論」の70年――「集団主義」説をめぐる言説の変遷」
小針浩樹（輔仁大学）「形容詞文の時間性と行為性」
横路明夫（輔仁大学）「新海誠作品における時間感覚――初期三作から『君の名は。』へ――」
野松循子（西南学院大学）「『虚空遍歴』と『龍の棲む家』の時間観にみる文学姿勢」
齋藤正志（中国文化大学）「〈時間〉の旅、その遡行と循環――川上弘美「墓を探す」における「ほととぎす」の役割――」
【第三会場】
王琪（九州大学博士後期課程）「日本語逆接表現「でも」と共起する表現についての一考察――会話の分析から――」
住田哲郎（京都精華大学）「テイル・テイク・テクルの類義性に関する一考察」
落合由治（淡江大学）「マルチモーダル領域における日本語研究の未来展望――ＡＩ自然言語処理研究への接続の観点から――」
盧ジュ鉉（徳成女子大学校）「韓国の大学の教養課程における日本

事情教育の現状と課題――ソウル所在の4年制大学の事例を中心に――」
勝又基（明星大学）「台湾から見える日本文学研究の新な景色――日本、米国の現状と比較して」
馮寶珠（輔仁大学）「初級日本語教科書における依頼表現の一考察」
梁乃允（中央大学校）「日本語学習者の丁寧体の話しことばにおけるノダの使用様相――書きことばとの比較を通じて――」
李桂芳（大葉大学）「教学ビデオの制作を取り入れた会話クラス」
【パネルディスカッション】
「日本研究の課題と展望――文学・言語・社会」
佐久間淳一（名古屋大学）、和田博文（東京女子大学）、盧ジュ鉉（徳成女子大学校）、八尋春海（西南女学院大学）、曾秋桂（淡江大学）
【ポスター発表】
池田純（拓殖大学博士後期課程）「多義性を持った漢語についての考察――「結構」「適当」「大丈夫」を例に――」
許夏珮（東呉大学）「絵本の朗読による台湾人児童の日本語習得」
徐孟鈴（銘伝大学）、何宜庭（銘伝大学修士課程）「アニメ・アフレコを大二会話に導入する試み」
張彩薇（京都大学博士前期課程）「1950年代日本における台湾認識」
林淑璋（元智大学）、呉翠華、鄧進宏、余耀佳、唐嘉鋒（元智大学学生）「初級日本語会話練習教材試作――ARと音声認識APIの活用」
徐翌（神戸大学博士後期課程）「日本SFの浸透と拡散――SF同人誌を中心に――」
陳冠霖（大阪大学博士後期課程）「台湾人日本語学習者と日本語母語話者による聴覚自然性評価の差異――フィラー、ポーズ、発話速度を加工した合成音声を利用して――」
林曉淳（世新大学助理教授）「「AI」の知識を導入した日本語授業の実践――日本のアニメを利用して――」
陳嫣如（静宜大学）「日本語と中国語における数量表現に関する研究――日本語学習者による数詞「一」の使用を中心に――」
斎藤敬太（津田塾大学）「方言理解支援ツール『東北地方の外国人住民のための「くらしの方言集」』の多言語訳から見た翻訳上の問題点――東北方言と6言語の対照研究を通して――」
神作晋一（南台科技大学）「丁寧体否定形式「～ませんです」の動向――国会会議録検索システムを例として――」
林蔚榕（東呉大学）「「おもてなし」の可視化について」
林暉恩（銘伝大学修士課程）「台日初級華語教科書分析――以語彙、語法以及會話情景為中心――」
【閉会式】
范淑文（台湾大学）、横路啓子（輔仁大学）

（台灣・國立國防大學語文中心專任教師）
（台灣・東呉大學・輔仁大學・中国科技大學兼任助理教授）